

国内研修報告書

【研修先】 こどもソーシャルワークセンター（滋賀県大津市）

【日時】 2018年2月14日（水）～16日（金）

【目的】

- 地域で子どもたちを支えるこどもソーシャルワークの視点を学ぶ
- 子どものSOSをキャッチする「場と関係性」について卒業論文の課題を検討する

【スケジュール】

2月14日（水）大津市要保護児童対策地域協議会・トワイライトステイ

2月15日（木）「ほっ」とる一む・SSWケース会議・子ども食堂

2月16日（金）「ほっ」とる一む・市役所回り・社協回り・一般社団法人セレンディップ

【事業内容】

- トワイライトステイ…平日夜の居場所作り。大学生や地域のボランティアが子どもたちと関わり、夕食や入浴、遊びなどをして過ごす。
- 「ほっ」とる一む…学校に行けていない子どもたちの日中の居場所。
- 子ども食堂（eattalk）…「ほっ」とる一むに来ている子どもたちとボランティアで夕食を食べる。ターゲット型の子ども食堂。
- その他
 - ・一般社団法人セレンディップ…就労支援とフリースクール事業を行う。

（ホームページ：<https://www.rekmit-serendip.org/>）

【考察1】

こどもを取り巻く状況をケースとしてのミクロ、自治体や地域としてのメゾ、国の施策としてのマクロの視点から整理して考察したい。

○ミクロレベル

研修中に小学3年生と小学5年生の男の子の兄弟、学校に行けていない小中高生の子たちと過ごす時間があった。言葉や行動が荒かったり、部屋では誰とも話すことなくずっとゲームをしたりしていた。「アイスとってきて」「ゴミ捨てて」と大人に指示してやってもらっていることもしばしばだった。家庭や学校などでしんどい状況にいる子どもたちの言葉や行動が荒かったり、誰かと関わることに苦手意識を持っていたりすることは大学でも学ぶことであり、理解しているつもりではあったが、実際に同じ時間を過ごしてみて、違和感を感じてしまう自分もいた。様々な違和感が混ざっているような感じではあったが、一つは、「それは甘えなんじゃないか」ということだった。しかし、それは甘えではなく、必要な経験である。環境が子どもたちに与える影響の大きさを感じ、こういった場で、大人がこども

に関わることの積み重ねで子どもたちが自らの方向を決めていくのではないかと感じた。

また、いろいろな食べ物を食べ、様々な遊びを経験して、その中で、私はこの食べ物が好き、この遊びが好きと言えるようになるように、いろいろな「場」や「人」と出会うことによって、私はこういう場やこういう人が好きと言えるようになるのではないかと思った。食べ物や遊びと同様に、人や場と出会う機会や体験を多く持つことの重要性を再認識した。

○メゾレベル

大津市では、2011年に中学2年生の男子生徒がいじめを苦に亡くなった事件以降、いじめ対策に力を入れている。自治体によって力を入れている政策に違いが生じ、それによって予算の割り当ても変わる。また、他の自治体と事業の運用が異なっていることもあり、自治体の特色が出るということがわかった。

また、子どもソーシャルワークセンターは、子どもたちと関わる大人を専門家ではなく地域の大学生やボランティアの方々に関わることに重きを置いている。「働きかける」ことはソーシャルワークの肝だが、知らない人たちに、知ってもらうことから始まり、関わってもらうまでの道のりの長さ、理解してもらうまでの道のりの長さを感じた。こうすれば上手くいくと教科書に書いてある答えのようにはなかなかいかないだろうし、進んでいるのかさえもわからなく感じるが多々あるのだと感じた。

○マクロレベル

子どもソーシャルワークセンターでは、トワイライトステイ事業を生活困窮者自立支援法の学習支援事業の予算を申請して行っている。ただし、学習支援事業では食事の予算はつかないため、食事は毎回センターの持ち出しとなるようだ。トワイライトステイ事業は、夜の居場所を確保するものだが、国の制度としてはない。制度があるに越したことはないが、制度としてなくても、他の制度を活用して事業を運営できるということがわかり、柔軟性が求められ、何よりも制度を実際に使いこなさなければならぬと感じた。そして、予算がつく制度は必要だが、制度も完璧ではないということが以前よりもわかった。制度に当てはまる人たちもいれば、当てはまらない人たちもいることを前提に、制度をもっと柔軟に使いこなせる力が必要であると感じた。

【考察2】

今回の研修目的の一つであるこどものSOSをキャッチする「場と関係性」について卒業論文の課題について考察したい。

卒業論文では、こどものSOSをキャッチする「場」として家庭や学校、地域やインターネットなどの情報空間を挙げ、かつ「場」だけではなく「場」に求められる人との「関係性」を整理した。ただ、「場」と「関係性」があれば、子どもたちのSOSをキャッチできるか、それで十分かと言えば、そうではない。今回の研修は、「場」と「関係性」をより良くする

ためのヒントがないかと思い、研修に参加した。

研修を終えて、幾つかの学びがあった。

①「場と関係性」は一つだけあれば十分というのではなく、複数あることが望ましい

②ただし、質より量というのではなく、質も求められるために、研修が必要

③複数ある「場と関係性」がネットワークのようにつながり、コーディネートできる人材がいること

④予算がつくように社会制度につなげること

今回の研修で幾つかのヒントを得ることができたが、まだ発展途上である。どんな場や関係性があれば、こどもたちや大人が暮らしやすくなるのか、今後も考えたい。

【最後に】

今年2月に社会福祉士の国家試験を受験した。資格を取得することが目的ではなく、人や社会の仕組みを理解し、制度を使いこなせるようになることを目的に勉強をしようと意識した。しかし、どうしても試験のことがちらつき、深く理解するというよりは知識として暗記に走ってしまったというのが試験を終えての感想だった。今回の研修は、試験を終えたばかりというのもあり、関係機関や制度など聞き覚えのある単語が多く、実際に現場ではこのような人たちがこうやって運用しているんだな、というのを以前にも増して感じることもできた一方、理解が足りないと感じることも多々あった。試験は終わったが、今後も勉強は続く。どれだけ理解したつもりになっても終わりはないが、何事もわかった気にならず、常に今よりも深く理解できるように努力していきたい。

そして、今回の研修でもう一つ強く感じたことは、知識は必要だが、こどもたちと接する時にこどもたちにとって知識は全く関係のないことであり、知識は時に固定観念や思い込みを生むということだった。そんな当たり前のことを改めて突きつけられたような気がした。わかったことも多くある一方で、新たな疑問もたくさん湧いた。見せかけの答えはそこから中に散らばっているかもしれないが、考えることをやめずに向き合っていきたい。

4月からは児童養護施設で働く予定だが、今後も学ぶ姿勢を忘れずに、たくさんのこどもたち、大人たちと関わっていきたい。

最後に、こどもソーシャルワークセンターの幸重さんをはじめスタッフの皆様、お忙しい中研修をさせていただきまして、ありがとうございます。そして、現代福祉学部の事務課の皆様、大学4年の最後の最後まで国内研修を利用させていただきまして、ありがとうございました。このような機会をいただきましたことに深く感謝申し上げます。